

「手放さない自由」

ローマ 8:31-39

2025 年 5 月 11 日

市橋隆雄師

1) 1970 年安保を前に大学が学生運動に揺れ、授業も行われない時期、私は何にも期待せずニヒルな日々を過ごしていた。そんな私に担当教授が小冊子 *Wo zo leben* をくれた。そして「これは、ナチスドイツの強制収容所でユダヤ人たちが歌ってた歌の一節だ。覚えておくといいよ。」と言ってこの言葉を教えてくれた。それが「Wir wollen trotz dem Ja zum Leben sagen (それでも人生にイエスと言おう)」だった。

2) その歌は *Buchenwaldlied* (ブエッヘンバルトの歌)。1938 年旧東ドイツ南部の *Buchenwald* 収容所で作詞作曲され歌われた歌だった。
ヒトラーに率いられたナチスドイツは組織的国家政策としてユダヤ人の大量虐殺を行った (Holocaust)。強制収容所で強制労働による根絶政策。強制労働、栄養失調、飢え、病、虐殺、人体実験。労働不能者はガス室に送られた。

3) ユダヤ人に残された選択は奴隷のような強制労働かガス室での死かの二者択一。このような状況下、人生何の意味を持つのか？人生に何を期待できるのか？それでも人生にイエスといおうと歌った。

4) 私たちの人生を意味あるもの、価値あるものにするものは何だろう？ ヴィクトール・フランクル “*Man’s search for meaning* (邦題「夜と霧」)”

一つは積極的な人生としての創造的な生活。何かを創り出す活動をすることで人生を価値あるものにする。そこではよりよい結果を出す人に喜びと感動を与える一切の行動が含まれる (農、工、商、教育、スポーツ、芸術活動)。

二つに受動的人生としての何かを体験することで人生に価値を見いだすこと。美しい自然、音楽、芸術作品、美味しい食事、見知らぬ土地への旅, etc.

5) しかしこの2つの生き方が不可能になった時、なお人生に意味、価値をどうやって見いだせるのだろうか？

交通事故で寝たきり、筋萎縮症 (ALS)、災難、苦難、逆境の中を生きねばならなくなったらどうだろう？

苦難、逆境は人生にはつきもの、それは運命や死と同様さけられないものに、苦難、死のない人生は人生として完全じゃない。もし人生に意味があるのなら、苦難、逆境、死の中でさえ意味がなければならない。

6)「夜と霧」の中で Frankle は記している。

「強制収容所を経験した人は誰でも、バラックの中をこちらでは優しい言葉、あちらでは自分の最後のパンの一切れを与えて通ってゆく人間の姿を知っている。そしてそれがたとえ少数の人々であったにせよ、彼らは人間が強制収容所の人間から一切を取り得るかも知れないが、しかしたった一つのもの、即ち、与えられた事態に対して、ある態度をとるということの証明の力を持っている。人間はどんな状況、事態に対しても、あれ、これの態度を取ることができるということは存在する。」収容所の毎日、毎時がこの内的な決断・選択をする機会を与えていた。その内的決断・選択とは、人間に内的自由と尊厳を奪い取られるか否か、事態・状況の奴隷、犠牲となるか、ならないかの決断、選択だ。

7) これを Frankle は態度価値と呼んでいる。

創造的に価値を実現化できる活動的生活、また美の体験、芸術・自然の体験の中に人生の満足感、充足感を享受する生活だけが意義をもつばかりではない。また、そんな機会が殆どない生活でも人生に意義を与えるものがなおある。それは全く外部からその存在が強制的に制限される事態、環境に対し、自分がどういう態度をとるかという決断の自由があたえられている、その自由を手離さないこと、そこに人間の尊厳 dignity がある。

8) 心理学者 Skinner は言う。「我々の人生は環境状況によって支配される。環境が人間掲載を決定する。(環境論)。

確かにそういう面はあるが、すべてではない。No という、我々は確かに状況、環境を選びとることができない。しかしその状況、事態、環境にどう応えていくかの選択はできる。その自由を決して手離してはいけない。奪われてもいいけない。

生きるとは問われること、応えること。

9) 人間としての尊厳は自分の決断、選択が自分の、そして他人の人生、そして世界の中で何か違いを生み出す、価値を生み出すことをいかに感じるかによって体験できるもの。

10) 「どうして私を怒らせるようなことを言うの、するの?」「私を失望させた!」と避難することがある。それは厳密な意味で正しくない。なぜならそう言うことで、君が(他者が)私の反応、人生、私というものを規定している。コントロールしているということを表明している。偽りだ!

11) 「どんなに避けられない運命、状況と、それがかする苦悩、辛さをどのように自分に引き受けるのかというやり方、どのように応答するかというやり方、言い換えれば私たちが自分の苦悩、逆境を自分の十字架としてどのように引き受け、負っていくのかというやり方の中に、たとえどんな困難な状況にあってもなお、それでも命の最後の1分までその命を有意義に形づくる可能性が開かれていること。

それを選び取る自由を手離してはならない。奪い取られてはならない。

12) コイノニアに通う子どもたちが生まれ育った環境は自分で選ぶとすることができないものだった。不衛生な生活環境、貧困、栄養失調、家庭崩壊、ニグレクト、DV、性的暴力、ドラッグ、犯罪。しかしその逆境に対してどう応えるか、その中からどう生きるのか、どんな人生を選び取るのかの自由は彼らの決断、選択に任されている。それを手助けしたい。

13) 彼らが神に意図された、神のかたちにつくられた自由な一人の人格として、自らの人生の支点を見だし、人生に意義を見だし、自由な人間として成長すること—この世のどんな力、どんな状況の犠牲にもならず、どんな状況にもイエスと言って応えてゆく自由を奪われないタフな僕として成長することを共にいて助けたい。

それが、”I still say Yes to life”というモットーにこめた決意。

14) なぜ Yes といえるか、その根拠はどこにあるか。ローマ人への手紙 8:31～39 に見事に宣言されている。読むだけで充分。

イエス・キリストによって示された神の愛から私たちを引き離すものは何もないという確信が与えられているから。